

吉田廣作メモランダムについて

——満洲製鉄鞍山本社におけるソ連軍の設備撤去の記録——

松 本 俊 郎

[1] 本稿では2010年5 - 7月に入手した吉田廣作メモランダム（吉田廣作メモ）を紹介する⁽¹⁾。同メモは、1945年8月に中国東北へ進駐したソ連軍が鞍山の地で行った工場施設の撤去作業や資材の略奪について、満洲製鉄鞍山本社の社員であり、撤去作業に動員された日本人の一人でもあった吉田廣作氏が記録した日誌形式の資料である。撤去の問題以外についても、鞍山における社会情勢の変化や残留していた日本人居留民の生活状況を示す貴重な情報が記されている。具体的には、八路軍が行った物資の徴発や戦犯の追及、時には対立することもあったソ連軍と八路軍の間の複雑な関係が記されており、また給与の途を断たれ、略奪や使役さらには戦火の危険にさらされる中で、隣組組織、大同39班の班長を務めながら、懐妊していた新婚の妻を守って不安な生活を送っていた吉田廣作氏の緊迫に満ちた体験が記述されている。メモの終わりとなる1946年7月31日の記録は、舞鶴の地で、「終戦后、初めて安眠、然も故国にて」と締めくくられている。

同メモの資料的な価値は、吉田氏がこのメモの主要な部分を帰国以前、すなわち従事した撤去作業や様々な体験についての記憶が鮮明な1946年5 - 6月の段階で文章化し、秘密裏に持ち帰ったところにある。敗戦直後の鞍山情勢を「個人」がクロノジカルに記録した資料としては、ポーレー調査団に提出されたSeo Kiyozo (1946) (瀬尾喜代三メモランダム) や聞人会編 (1969) に収録された池尻半太郎「鞍山日記」、そして満洲製鉄鉄友会編 (1957) に収録された安田一郎「安田一郎日記抜粋」がある (松本, 1995, 1996)。このうち瀬尾メモランダムと安田一郎日記は、帰国前に執筆された数少ない記録資料である。1945年秋に行われた撤去作業の体験を即時的にまとめた記録としては、このほか中村巖・沖原光彦・山田敏郎 (1946) や1946年10 - 11月に関する阿部邦雄 (1946) がある。また以上の体験記録を含む国内外の資料を渉猟して作成された池田拓司 (2003年) が、1945年1月1日から1946年12月31日までの鞍山における毎日の出来事を詳細に整理し、あわせて年表事項として記載する際に典拠とした資料名を明らかにしている。しかし、ここで紹介する吉田廣作メモは、これまで資料として取り上げられたことがなかった。吉田廣作氏自身はメモの公開について消極的であり、またメモの存在については吉田氏の身近にいた家族と親族にしか知られていなかったためである。

吉田廣作メモの内容は詳細で、収録されている情報也多岐にわたっている。吉田氏は戦前、満洲製鉄鞍山本社 (昭和製鋼所) の総務部文書課に勤務していた。後に北方調査班 (対ソ資源製鉄部門) の班員を兼務することになり、満鉄北方調査室と連繫するとともに、第2次大戦の開戦以後は暗号電報に関わる任にも就いていた。こうしたバックグラウンドは鞍山情報の入手と観察そしてメモの作成に

際して大きな意味を持ったと思われる。実際、メモの記述の中には満洲製鉄の一般社員、ごく普通の鞍山市民が1946年5月の時点で入手することは難しかったと思われる情報が多数含まれている。

吉田廣作メモには、登場する個人名や描写された情景が瀬尾喜代三メモランダムのとおり二つな箇所が多々見うけられる。瀬尾メモランダムはポーレー調査団の要請に応じて作成された英文資料であるが、原文は日本語で用意されていたと思われる。瀬尾喜代三は満洲製鉄鞍山本社（旧昭和製鋼所）の常務理事であったから、総務部文書課が指示を受けて原文の作成と英訳を担当し、その作業のどこかに吉田氏が関わっていた可能性もある。瀬尾常務理事は吉田廣作氏の結婚式にも列席しており（1945年11月12日）、二人の間には個人的にもつながりがあったものと思われる。

吉田廣作氏の妻文氏^{ふみ}と長女京氏^{みやこ}が作成した「吉田廣作 年譜」（2010年7月）に基づいて氏の経歴を簡単に紹介しておくと、吉田氏は1915（大正4）年に京都府加佐郡余部に生まれた。舞鶴中学校を卒業後、1932（昭和7）年に海軍爆薬廠火薬製造工場に就職したが、赤色火薬にかぶれたために、海軍工廠の下請け会社にトレース工として転職した。その後、海軍工廠の設計部にスカウトされて砲塔設計の職に就いたが、給料は正方交渉の代表となった折りに責任をとって辞職している（1937年7月？）。退職後、吉田氏は1937年8月に川西航空機に設計部の航空機兵装設計要員として採用されたが、1938年9月に新聞広告を見て昭和製鋼所の社員募集に応募し、採用された。9月18日に神戸港から吉村丸に乗船し、渡満している。渡満手当95円が支給されたが、この時、船中のビールは1本22銭であった。鞍山に着任すると、吉田廣作氏は一緒に吉林丸に乗船した採用者全員を集めて吉林会を組織し、昭和製鋼所との交渉窓口を一本化している。

昭和製鋼所では総務部文書課文書係に配属され、社内資料、対外文書、契約書等の点検、訂正、起案等を担当したが、既述の通り、北方調査班（対ソ資源製鉄部門）の班員を兼務して満鉄の北方調査室と連絡するとともに、第2次大戦の開戦以後は暗号電報の任にも就いた。こうした戦時中の活動について吉田氏は記録を残しておらず、家族にも詳しくは語らなかった。ただ、吉田京氏よれば、吉田廣作氏はロシア語が堪能だったわけではなく、暗号は日文に関わるものであったという（2010年8月4日の電話での説明）。

吉田氏は帰国後、次兄の家業である塗装請負を手伝っていたが、1947年4月に、飯野産業株式会社に就職した。同社は飯野海運の関連会社で（1953年に飯野重工業に改称）、戦後は舞鶴海軍工廠を引き継いで発展した（飯野海運、1959、535、740－2ページ）。吉田廣作氏はそこで部長待遇にまで昇進したが、1963年にサルベージ部門の関連会社である日本海事興業に移籍し、1965年には同社を退職して、翌年1月に新日本海事工業会社を立ち上げ、その代表に就任した。1988年に同社を辞職してからは悠々自適の生活を送っていたが、2009年6月27日に94歳で亡くなられた。

人名や固有名詞についての記述が詳細であることから明らかなように、吉田廣作氏は記憶力のある人物であった。吉田文氏によれば、吉田氏は90歳を過ぎても頭脳が明晰で記憶がはっきりしていた（2010年7月14日付、松本俊郎宛の吉田文氏私信および2010年11月27日の吉田文氏宅での聞き取り）。しかし、松本がメモの存在を知った2010年4月の時点で吉田廣作氏はすでに逝去されており、ご本人にメモの内容を確かめることはできなかった。

〔2〕吉田廣作メモランダムと呼ぶべき資料は3点ある。最初のメモは吉田氏が帰国前に手帳の紙面

に記憶をしたためて小さく折りたたみ、リュックの肩紐の芯として縫いこんで密かに持ち出したものである(第1メモ)。用紙にはその折にできた縫い跡がたくさん小さな孔として残っている。リュックは帯芯を用いて吉田氏が自作したが、メモを縫い込むに当たっては吉田文氏が手ほどきを行った(2010年8月4日付、吉田京氏の松本俊郎宛私信)。遣送作業を取り仕切っていた国民党軍は写真や書類を持ち帰ることを厳しく禁じ、発覚した場合には居住していた地域毎に団体行動をとって移動していた遣送者グループに対して連帯責任をとらせると宣言していた(松本、2000、24ページ)。このため多くの帰還者は心ならずも手紙や日記そして写真などの物品を旧居の地に残してきた。吉田廣作氏も帰国した後で、多くの写真を焼却処分にしてきたことを悔しく思っていた(第3メモ、7月中旬の項を参照)。第1メモはこうした制約条件の下で日本へ持ち出された貴重な歴史資料である。



写真1 吉田文氏(1922年7月28日生)
2010年11月27日、舞鶴の自宅にて筆写撮影

吉田廣作メモの存在については、2010年4月21日に青山ダイヤモンドホール(東京)で開催された「鞍山の会」⁽²⁾の席で、風間 充^{みつる}氏からご教示を得た。風間氏は吉田廣作氏の義理の弟に当たる方である。その後、5月になって、風間氏から第2メモのコピーが送られてきた。第1メモと第3メモは、風間氏の紹介を受けて連絡を取ることができた吉田文氏から2010年7月に提供を受けた。この段階で吉田廣作メモには三つのバージョンがあることが判明し、その内容を比較することも可能になった。

第1メモは、ほぐされた手帳のページ(縦97ミリ×横57ミリ)と昭和製鋼所の用箋を切り取った紙片(122ミリ×90ミリ)に書き込まれている。写真2は、若干拡大したサイズで印刷した同資料の一部である。見られるように、吉田廣作氏は達筆で、紙面に書き込まれた文字は小さく、びっしりと詰まっている。判読できない文字ではないが、拡大処理をしなければ読みにくい。また第1メモは文字通りのメモ書きであり、吉田廣作氏による整理が十分ではないまま書き込まれた。思い浮かんだ段階で書き加えられた一部の記録については、本来の場所とは異なる余白部分に記載されており、日付の対応については注意が必要である。

吉田文氏によれば、吉田廣作氏は帰国のめどが立った1946年5月頃から、隣組の仕事の合間にこの

メモを作成した。「綿をうどん状に寄り合わせた灯心で小皿の食用油を灯し、手帳に一心不乱に細かい字で書き込んでいた」という。帰国の噂がたつてから「リュックを帯芯で作製、その肩紐にメモを芯のように包み込んで荒く綴じ持って帰ってきた」（吉田文・京，2010）。このように第1メモは撤去作業から約半年後の、まだ残留生活が続く中で作成されており、執筆時点における記憶の鮮明度という点で資料的価値が高い。

第2のメモは、吉田廣作氏が帰国後に、持ち帰った第1メモの内容を整理し、情報を書き加えたものである。そして第3のメモは、吉田氏が以上の二つのメモの内容を横書きのノートに再整理し、表現を整えた記録を、吉田京氏が転写したものである（2010年8月4日付、吉田京氏の松本俊郎宛私信）。解説をまとめるにあたって吉田文氏が所蔵している元ノートについても確認を行った。第3メモの内容は、引き上げの経緯に関する限り、吉田家の私事に関わるごく一部の項目が省略されているだけで、元ノートのそれと同じである（2011年11月27日、舞鶴の吉田文氏宅で確認）。

3つのメモに記録されている期間は、いずれも1945年8月15日に始まっているが、終わりの日には異なっている。第1メモは1946年6月3日、第2メモは同6月1日に記述が終了しているが、第3メモの元になったノートには戦後の暮らしについても記述が続いている。しかし、戦後に関する分量は断片的で量的にも少なく、引き揚げに関わる記述は7月31日までとなっている。

各メモはいずれもインクで記されているが、第1メモの最終ページだけは鉛筆書きとなっている。第1メモには6月4日以降についても数日分の記録があったように見えるが、この部分については残念ながら判読することができない⁽³⁾。

後掲の第3メモの復刻文の中で、6月4日以前の項目については一部に波線が伏されているが、この部分は帰国後に補足と訂正が施された箇所であり、第1メモには含まれていない情報である。

文体と表記の方法にも若干、違いがある。第1メモは漢字カタカナ交じりの縦書き、第2メモは漢字ひらがな交じりの縦書き、第3メモは元ノートも吉田京氏による転写も漢字ひらがな交じりの横書きで記されている。前2者の表現は硬く、後者のそれはやや柔らかい。書き直しを重ねる中で文章上の推敲も施されている。以下には一例として1945年10月31日の記述を挙げておく。

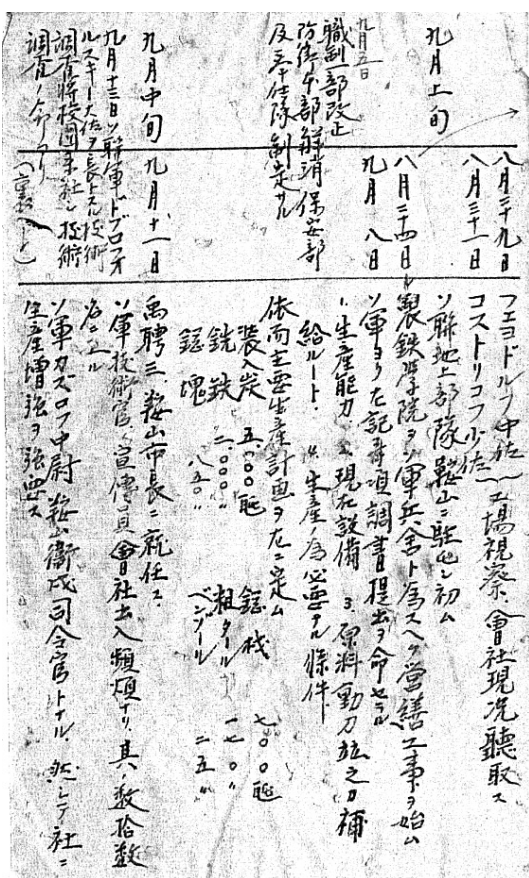


写真2 8月末から9月中旬にかけての状況を記した第1メモの一部

<1945年10月31日>、

第1メモ：八路軍1,500鞍山進駐ス。市長，叢振東。副市長，李耀奎。

理事長ヨリソ軍ハ近ク撤退スルモノト思料サル，從而遠カラズ中国側ニ接收サルニ付残存施設ノ整ビ修繕ヲナスト共ニ復興計画ヲ至急樹立スベシトノ命アリ。尚全社員ニ此ノ旨ニ則リ訓辞アリタリ。

第2メモ：八路軍1,500鞍山進駐。禹市長等逃亡。新たに叢振東。副市長，李耀奎就任。

本日，理事長ヨリソ聯軍は近く撤退するものと思はる。引続き中国側に接收されるものと思料す。依而，^{よつて}残存施設の整備補修をなすと共に復興計画案を至急樹立の要ありとて社員に訓辞あり。

第3メモ：八路軍1,500人鞍山進駐。禹市長等逃亡。新市長，叢振東。副市長，李耀奎。

本日，理事長ヨリソ聯軍は近く撤退するものと思われ，何れ中国側に^{よつて}接收される，依而，残存施設の整備補修をなすと共に復興計画案を早急樹立し置く要ありと訓辞あり。（ルビは松本による）

見られるように，3つのメモは表現に違いがあるものの，記述された内容は同じである。第2メモ，第3メモとなるに従って表現がこなれ，また情報量も特に第2メモの段階で増えている。他の部分を含めて全体としての比較をまとめるならば，重複している項目については，文章表現に若干の違いがあるものの，第1メモの内容と第2，第3メモの内容は照応する。ただし，第1メモから第2メモへ移る過程では貴重な情報がかなり補充されている。そして第3メモは吉田廣作氏自身が2度にわたって記憶を整理した結果，まとまりが良く，また帰国後の1946年6－7月の情報という点では第2メモにも記載されていない内容が含まれている。そこで本稿では第3メモの内容を紹介することにする。明らかな誤字については第1メモと第2メモ，そして瀬尾喜代三メモランダム等に照らした上で訂正し，句読点については最小限の追加を行った。（ ）内は吉田廣作氏が第3メモを作成する時点で行った行った補足である。＜＞内の補充と漢字へのルビ付けは松本が行った。第1メモと第2メモの全体については，第3メモとあわせて複製を製本し，岡山大学図書館に寄贈することにする。

[3] 吉田廣作メモランダム（第3メモ）の内容について

記載された記録の内容は以下の通りである。

1945（民国34，昭和20）年

8月15日 0800 出社と同時に敗戦の事実を知る

1200 停戦に関するラジオ玉音放送あり。

岸本理事長（陸軍大将岸本綾夫）より全社員に対し設備の保全，作業継続の旨，訓辞あり。

今後，本支社間相互連携困難を見越し，各支社長に於て独自に善処すべき旨，満系連絡員を派す。

勤奉隊，學徒動員者を解散せしむ。

<Cf.「社員貯金一部拂出シ」（第1メモ）。>

- 8月18日 この頃よりソ聯軍空軍、機械化部隊（米国製トラックが主体）、鞍山周辺続々南下す。
南下に当り社保有の衣料、雑貨、食料品を随時徴発搬出す。
- 8月21日 ソ聯軍イワノフ少佐、軍使として鞍山入市。
- 8月24日 軍使の命により製鉄学院を軍兵舎とすべく營繕工事に着手す。
- 8月25日 軍使、工場を視察。
- 8月26日 特別警備隊を編成し、工場地区の整備に当らしむ。
- 8月27日 鞍山工場生産目標決定。
高炉2本操業。装入炭1,900吨。
バイダレイコフ中佐、鞍山空軍司令官、駐屯軍司令官及司政官として着任す。
本日、中ソ友好条約発表さる。
- 8月28日 ビ中佐、来社。設備保全に満足の意を表し、今後の作業平常化を求む。
- 8月29日 フェヨドル中佐、コストリコフ少佐、工場視察。会社現状につき聴取。
ソ聯軍、地上部隊、鞍山駐屯を始む。
- 9月5日 会社職制、一部改正。
防衛本部を解体し、保安部及奉仕隊制定さる。
- 9月8日 ソ聯軍より下記事項調書提出を命ぜらる。
現有設備、生産能力、原料、動力並之が補給ルート、出銑継続に必要な条件。
よつて
依而主要生産計画を次の通り定め報告す。
- | | |
|-------|--------|
| 装入炭 | 5,000吨 |
| 銑鉄 | 2,000吨 |
| 銅塊 | 850吨 |
| 鋼材 | 700吨 |
| 粗タール | 170吨 |
| ベンゾール | 25吨 |
- 9月11日 禹聘三、鞍山市長に就任。
この頃、ソ聯軍技術者他、会社出入頻繁となる。
＜Cf.「ソ軍技術者、宣傳員、會社出入頻煩ナリ。其ノ数拾数名ニ至ル」（第1メモ）。＞
ソ聯軍カズロフ中尉、鞍山衛戍司令官となり、生産増強を強いる。
- 9月13日 ドブロフスキー大佐を長とする技術調査団来社。種々資料提出を求む。
ソ聯軍として本日、会社保有衣料徴発。貨車積込労役。
- | | | |
|-----|------|------|
| 小麦粉 | 積込車両 | 17輛 |
| | 積込数量 | 450吨 |
| | 動員数 | 340人 |
- ＜Cf.「全日、第1回ソ聯軍命令。小麦粉貨車積作業アリ」（第1メモ）＞
9月中旬、生産強要の為、撫順、本溪湖に原料炭入荷に特別列車を仕立てる。
カズロフ中尉、市民より各種物品の供出を強要す。

9月18日 岸本理事長、生産増強に対する必須条件並従業員給与等に関し懇請の為ド大佐及カズロフ中尉に面談。

<Cf.「理事長、ヴルコフ大佐ト會見」(第1メモ)。「岸本理事長、生産増強に対する必須条件並従業員給与等に関し懇請の為技術官ヴルコフ大佐と會談。」(第2メモ)。いずれも下線は松本)>

工場操業にソ連側熱意なきを看取す。

第2回食料積出

白米 55屯

小麦 349屯

貨車 15輛

動員数 240人

9月20日 ドブロフスキー大佐、カズロフ中尉、理事長を招致し、生産施設の2/3を解体撤去し、ソ聯本国へ搬出すべき旨命令。ソ聯側は社内の撤去本部を編成す。

主席 グザロフ大佐

次席 リアボフ中佐

<Cf.「事情已ムヲ得ザルモノトシ受諾ス」(第1メモ)。>

9月25日 解体撤去作業開始さる。

この頃より八路軍、鞍山市内に駐屯し始む。

10月5日 八路軍、公安局(満系日系にて警察隊を組織)と鞍山駅前にて衝突、発砲事件あり。ソ聯軍により八路軍は市外20kmに退去を命ぜらる。

本件、便衣八路の市内潜入の基となる。

10月10日 双十節式典、市長主催にて行われ、部長以上列席。

本日より撤去促進の為、事務系社員及一般市民も動員さる。

戦時中、生産増強並警備の為、当市駐屯の日本軍作業隊並鞍山部隊3,000人は、軍編成の儘、撤去作業に従事す。又、武器保持を許され、会社警備に従事す。市内治安良きもその為なり。

第3回食糧積出

小麦 12屯

貨車 3輛

動員数 50人

10月13日 在華鞍山日本僑民会、業務開始。

10月14日 集中倉庫内、雑品倉庫二棟及酸素倉庫一棟、暴民により放火全焼。

10月15日 構内警備に日本軍増強さる。

10月20日 弓張嶺鑛業所、撤去完了。

10月24日 厚生部長福田義隆、柳町倉庫警備中にソ聯兵に射殺さる。

10月26日 倉庫管理、ソ聯軍司令部に移管さる。

10月31日 八路軍1500人、鞍山進駐。

禹市長等逃亡。新市長、叢振東。

副市長、李耀奎。

本日、理事長よりソ連軍は近く撤退するものと思われ、何れ中国側に接収される、
よつて、依而、残存施設の整備補修をなすと共に復興計画案を早急樹立し置く要ありと訓辞あり。

11月1日 満洲重工業（株）高碕＜達之助＞総裁、奥村＜慎次＞理事、スラドフスキー大佐一行、
空路来社。ソ軍要求により満業傘下全会社の全施設に対する権利を引渡すべく当社の同
意調印を求めらる。

調印後、直ちに空路大連に向かわれる。

“もてなすに菊一鉢の番茶かな”

11月2日 ソ聯軍退出後の残存施設復興計画案なる。

營口八路軍に拘留中の錦縣採鉱所員、無事救出さる。

奉天に避難中の東辺道支社社員家族、生計困難の報あり。

トラックにて鞍山に救出せり。

11月6日 日本軍、構内整備撤収。

日本軍、全て武装解除の上、近江小學校、富士小學校、鞍山女學校に終結。ソ聯軍、監視す。

11月7日 日本軍、構内警備撤去後の警備の為、保安隊1,200人動員す（独身社員より）。

11月8日 撤去作業完了す。

ソ聯軍並技術官の大半、奉天、大連に引揚ぐ。

撤去作業官僚と共に整理整頓の為、理事長より出社命令発せらる。

暴民、構内進入物品持出し頻繁なり。

日軍兵士脱走し、市民に假装する者多し。

11月9日 撤去隊長グザロフ大佐、李政治委員、叢市長と共に来社し、会社管理の責任者にはバン
ダレンコ中佐之に当る。ソ軍撤収後は中国が接収す。

会社警備は八路軍300人之に当たる旨、申渡しあり。

11月10日 在鞍日本軍、ソ聯軍撤退北上に連行さる。

倉庫管理八路軍に引継がる。

八路軍、本社本館に常駐す。

ソ軍、撤退に際し、石炭、鋼材、木材を旅順に向け積出す。

9～10月にかけて約40,000屯、作業用炭を積出す。

＜Cf.「理事長ヨリ残存施設早急整復旧、中国側正式接収迄ノ勤ムニ付訓辞アリ。ソ軍、
石炭、鋼材等ヲ旅順、大連向積出す。満鉄ニ対シ石炭ヲ九月ヨリ十月ニカケ約40,000吨
積出す」(第1メモ)。下線は松本＞

11月12日 中台町、曾谷總一氏宅にて挙式婚姻。

媒酌 製鉄部事務長＜製鋼部事務課長＞ 曾谷總一

々 製鉄病院副院長 井幡清一＜眼科＞

<Cf. 井幡清一は1945年7-8月現在、病院長になっていた（松本）。>

列席者 常務理事 瀬尾喜代三

総務部長 古賀 松二

文書課長 香川

11月13日 独身寮井々祭より家財道具運搬（下台町、宮尾家へ）

途中、暴民に襲はれ身一つにて逃れる。

11月20日 社友会設立要綱なる。

八路軍、市内外に陣地構築を急ぐ。

製鉄学院、ソ聯兵舎跡、八路軍兵舎となる。

11月22日 八路軍、本館搜索す。

武器隠匿の嫌疑にて保安部長西一幸、拘引さる。

11月23日 西一幸、釈放さる。

11月25日 八路軍、会社金庫封印す。

11月26日 七嶺子事件あり。

脱走日軍、千山に集結。密かに国民党と連絡を計り、八路軍打倒を策す。

八路軍内に諸派あり。李代表等退き、禹前市長、再度市代表となるを、上台町の官舎を襲いたるも失敗す。

千日軍の一派、七嶺子に下山し居るを探知せられ八路軍に討たる。

11月28日 岸本理事長、労務報国会小林主事、今津秘書係員、八路軍に拉致さる。

11月29日 ソ聯軍の随時持出しにて社保有衣料、雑貨、食料、皆無くなる。

12月1日 舟田、女中、理事長夫人、拉致さる。

12月3日 矢野<耕治>常務理事、古賀<松二>総務部長、拉致さる。

12月5日 クリビン中佐、来社。構内外の清掃命ず。ソ聯兵、本館に居住警備駐屯す。

12月15日 禹市政府代表、本館に駐在。

12月18日 田中<恭>常務、大連に赴く。

12月27日 酒家<彦太郎>經理部長、新京に赴く。

八路軍、在鞍重役より300萬圓を強要す。

12月31日 理事長、矢野常務、釈放嘆願の為、社代表、市長に面談。

1946（民国35，昭和21）年

<Cf.「1月4日 禹代表、会社復興ニ関シ陳市長其ノ他ニ説明ス」（第1メモ）。>

1月15日 中国共産党鉄仲、来鞍。

東辺道新華機械工場工員募集を始む。

1月17日 市政府、会社組織を改め

理事長 周明

副理事長 葉

運輸部長 楊

機械部長 孫

- 1月26日 奉天よりソ聯大佐、来社。社を正式に市に接授するに付、書類作成を命ず。
- 1月30日 上記接授中止となる。
- 2月5日 会社はソ聯の管理工場となる旨発表さる。
 <Cf.「ソ聯技師ガルコビッチ理事長、技師長トリューポフ発表アリ」(第1メモ)。>
- 2月6日 理事長 ガルコビッチ
 技師長 トリューポフ
 日本側技師長 瀬尾<喜代三>理事
 <Cf.「會社ソ聯ノ管子工場トナリ之ガ職制発表サル」(第1メモ)。>
- 2月中旬 在金州重機工場長高橋<文太郎>、金縣公安局より釈放。
- 2月22日 ソ聯軍技師2人増員さる。
- 2月25日 下防衛本部長師橋<渡>、八路軍に拉致さる。
- 3月8日 ソ聯退去。八路軍、社の警備につく。
- 3月11日 矢野常務、古賀部長、釈放去る。
- 3月15日 共産党東北銀行券発行。1/2の率にて交換の為布告。
 物価暴騰す。
 交換する者少なく、ソ軍々票、旧日本国通貨を使用。
 <Cf.「共産、東北銀行券発行ノ布告アリ。物價二倍ニ騰ル」(第1メモ)。>
- 3月16日 19時、50サイクル電気停電。
 水源地機能停止。工場、全市、断水。
 工場のみ60サイクルに切換。
- 3月20日 僑民会長 岩橋<三七男>、八路強要軍費を日系市民に割当てた罰。
 師橋<渡> 退役大佐。戦犯として。
 岡野 防衛本部員。元刑事。社の特労班として満系に恨みを買う。鈴木 不詳。
 以上、銃殺さる。
危険を感じ、吾、本日以降出社せず(時に出社す)。
終戦后本日まで無給出社(接待要員として)。
- 3月21日 0130 工場得電力、全面的に停電。
豊満ダム施設撤去。原料炭不足。送電係の八路軍による切断等悪条件のもと、細々と自家発電していたものである。
- 3月23日 中央軍(国民政府)進駐の噂しきり。
 社警備のソ軍引揚。八路軍亦一部保衛隊を残し、殆ど社より引揚。
 依而暴民襲撃に備え日本人独身社員100人社の保安部員40人にて特別警備隊を編成。本館正門、各事務所、研究所、電話交換所の警備に当らしむ。
 午後に至り八路軍保衛隊、構内より姿を消す。

3月25日 ソ聯理事長、大連に引揚ぐ。

八路撤退に際し社品持出差支へなき旨公言せりとか。構内倉庫に満系殺到。

<Cf.「コノ頃ヨリ八路軍社品搬出ニ差支ナキ旨公言セル為、連日社品持出（主トシテ骸炭）社構内ニ殺到ス（第1メモ）。八路軍社品持出差支なき旨公言せる為、生計所竝倉庫、構内に満系殺到す」（第2メモ）。>

又、極度の燃料不足に悩む日系人も亦、構内コークスの持ち出しに来る。

本日、電話不通となる。

3月26日 発電所配電室、放火炎上。

首山水源地事務所、八路軍爆破。

<Cf.「発電所配電室、暴民及八路軍ニヨリ火災発生ス。首山水源地事務所 建物八路軍ニヨリ爆破サル」（第1メモ）。>

<3月28日 電話交換所、八路軍竝暴民に破壊さる（第2メモ）。>

3月29日 厚生部長 天野<堅次郎> 八路軍拉致。

勤労〃 阿部<常就> 〃 〃。

中央第1ポンプ所、爆破さる。

高炉骸炭ガスホルダー、〃 〃。

3月31日 八路軍劉特務団長、会社金庫より現金全て持去る。

工務会社、古江<茂橘>取締役、拉致さる。

4月1日 古江、釈放さる。

中央軍、一部初音方面に潜入。銃声あり。

本日、八路軍より使役として区事務所に1,200参集を命ぜらる。その後、満鉄病院に移動。

八路軍、敗退に伴い負傷兵をタンカにて後送を命ぜらる。

1700 満鉄病院発、南下す。

タンカ数120。1タンカに使役8人。夜行軍にて湯岡子に至り負傷兵死亡するも、その儘、担送を命ぜらる。

担送先、海城と判明。鞍山～海城44km。

途中、北上の八路軍と会う。

本日、本館食堂炎上す。

4月2日 0430 海城着。旧日本軍陸軍病院に収容せしむ。時に0630なり。朝食支給するに付、待機を命ぜらる。

その朝、男装の看護婦より海城より更に南下、引続き使役の恐れありとして逃亡をすゝめらる。

依而4人誘い合はせ病院より逃亡す。

海城～鞍山間、北上の八路軍に混れ込み帰途につく。

南台に至り足痛にて歩行困難。馬車1台を賃借し鞍山に向う。

鞍山市街競馬場より馬夫市内に入るを肯んぜず。徴発さるを恐れるなり。賃4人にて1

人当り100圓，ソ聯軍票にて支拂う。

競馬場より大同区宅まで平常なれば1時間半の道を約4時間を要し，帰宅す。時に14時過ぎなり。

小生不在中，八路軍より使役料として高粱2斤しありしに驚けり。

本夕，中央軍1小部隊，鞍山に入市。

<Cf.「八路軍，正式入鞍ス」(第1メモ)。「物価高騰す」(第2メモ)。>

4月12日 隣組を通じ旧会社員の出社を要請さる。

中央軍に引渡すについて社内清掃実施の為なり。

出勤延9,000人の奉仕あり。

<Cf.「本日ヨリ向フ五日間，旧社員ヲ動員。会社構内ノ清掃ヲ実施ス。動員数延9,000名ナリ（無給奉仕当然ノコトナリ）」(第1メモ)。>

4月16日 接収要員により正式社の接収あり。

4月26日 社より呼出しあり出社。

中央軍により社は經濟部瀋陽辦公処鞍山辦事処鞍山鋼鉄廠となり。庶務組文書担当員として勤勞を命ぜらる。

事務所は研究所なり。

5月1日 大同区39班班長となり。48戸52世帯の責任を負はされるに至る。

この頃より内地帰還の噂しきりなり。

5月5日 俸給750圓を受く。終戦后初めての俸給なり（東北9省流通券にて）。

5月18日 鋼鉄廠にて満洲残留希望者を募集す。

生命財産の保証なし。帰国の腹を固む。

物価高し。高粱1斤18圓となる。

八路便衣，市内潜入の噂高し。中央軍入試後，警察隊誕生す。

<Cf.「本日迄ニ残留希望申出ノ案アリ。今度ノ見透シ付カズ。一應帰還ノ意ヲ定ム」(第1メモ)。>

5月24日 早朝出社の途，曙町派出所前にて満系2名裸馬にて立山街道より来り去るを見る。

出社するに要人等全て退去し居り。満系幹部より急ぎ帰宅をす、められる。

帰途，顔見知りの警官全て便衣となり居り。辻々にて誰何されつゝ，無事帰宅す。

13時過ぎより銃声甚し。15時過ぎ八路軍七嶺子並鉄西方面より入市せる模様。

5月25日 八路系七区政府樹立され，種々物品の供出を命ぜらる。

中央軍，全て退却せる模様。

隣組にて井戸掘を始む（飲料水欠乏）。

5月26日 八路軍，陣地構築に使役徴発。

本日，当班より4人使役。

5月27日 使役あり。

<Cf.「種々使役命令アリ。生命ノ危険アリ恐々トシテ落付カズ」(第1メモ)>

- 5月28日 使役あり。
＜Cf.「本日、使役7名アリ」（第1メモ）。＞
- 5月29日 使役あり。
生命に危険あり。使役供出指名難し。
各家族共恐々として落ちつかず。
中央軍、入市近しとの噂あり。本日の使役、タンカなり。
＜Cf.「八路使役帰宅セズ。心配ナリ」（第1メモ）。＞
- 5月30日 本日、使役5人。
29日使役未だ帰宅せず。
砲声、銃声、聞ゆ。1900 高炉爆破大炎物凄し。
＜Cf.「使役ボツ〈ボツボツの意か?〉帰宅シ始ム。銃声盛ナリ。夜七時、八路、高炉ノ爆破ナス。火炎凄シ」（第1メモ）。＞
- 5月31日 早朝より使役者、個々に帰宅。家族に申訳立つ。
正午頃より中央軍、立山街道を南下し来る。銃砲声甚だ大。
中央軍、自宅玄関前に機銃座を設く。暈を窓に立て懸け床下に避難。
中央軍航空機の空爆ダイビングを窓より見る。夕刻、納まる。
物価高凄し。
- 6月1日 中央軍、続々南下す。部隊大同区通過の度に使役物品の供出を命ず。
組長を招集し打合中、中央軍兵士2名、土足侵入。物品を漁る。文、靴1足を持ち、裸足にて隣宅に難を避く。被害約800圓。徳山被害200圓見当。
- 6月2日 中央軍、使役あり。
- 6月3日 隣組井戸、完成す。
研究所に出頭。清掃を始む。
鋼鉄廠事務は厚生館にて執ることとなり、各部より連絡員数名を詰めるものとし、庶務組は全員出勤を命ぜらる。
夜、自宅にて組長会議中、山香弘夫氏長女萬里子嬢死去の連絡を受く。通夜にゆく。終夜痛飲す。
＜Cf. 以下は第1メモに記載無し。＞
- 6月4日 埋葬を行う。
この頃より内地送還具体化し始む。
鋼鉄廠庶務組にても残留問題話題となる。
日僑俘管理処より送還について種々通達あり。
39班、52世帯、346人の帰還手続書類の作成に追われる。
瀬尾＜喜代三＞常務、曾谷＜總一＞、古賀＜松二＞、山香＜弘夫＞、残留と聞く。
通達の一部
写真類の持帰り不可。

持帰り物品につきてもシャツ、パンツ、靴下に至る迄も1人何点。内地持帰り金類も1人1,000圓に限らる。

道中の食料として腐敗し難いもの約10日分等々。

各家庭にて家財衣類等満系に売却を急ぐ。

手続書類完成するも吾が家のみ引揚準備し居らず。書類完成を期に班長辞任を申出で急ぎ支度にかかる。

我が家にては

食料 メリケン粉による焼菓子10日分

塩、砂糖 少量

水筒 2ヶ（1.5升入り）別誂^{あつら}へ

1本 茶湯

1本 日本酒（道中用）

他は指示通りとし、唯、終戦後の記録をメモ書とし、又、満洲に於ける写真は全て焼却、僅かに肉親者の顔写真のみメモ書と共にリュックの背向帯の中に縫込みたり。

リュックは文の帯芯を利用し、急ぎ縫いせるものなり。

今にして思えば現地写真をば持ち帰るべきであり、惜しき限りなり。

7月2日 日僑俘管理処にて予防注射を受く。

7月早々宮尾の父、引揚近しとて別れに見え、酒盃を揚ぐ。父に会う最后なり＜帰国後に再会。2010年11月27日、文氏、談＞。文懷妊を喜び居れり。

各地区にて引揚月日は異なるも、大同39班は7月 日＜日にちは空欄＞、鞍山駅発の通達あり。

班長は引揚時、中隊長として一同を引率の責任あり。組長及び隣組一同、自宅前に集合。辞任取消を要請さるも、リュックを縫いつ、受け付けず。出発日0200頃完成。

中隊長は予備中尉加藤氏が就任す。

7月中旬？大同区より鞍山駅まで徒歩。前夜殆ど眠りをとらず。

約6kmの工程、荷重く、肩痛し。

鞍山駅にて暴民略奪を警戒しつつ、出発を待つ。

15時頃、鞍山出発。貨車にて錦縣に向う。

宿舎として旧日本軍兵舎の馬小屋を割当らる。

馬一頭分、約3畳程の土間に13人の割当となる。

婦女子を土間に、他は通路に寝る。黑暗なり。

食事は使役当番制とし高粱の合同炊飯なり。

本兵舎には、鞍山市他地区よりの者、又、他年寄りの者など乗船待ちの者、約3,000人集結し居る由。

兵舎構内に満系による売店あり。米、塩、砂糖、豆、煙草、日本酒、菓子、誠に物資豊

富なり。

各人持帰り1,000圓と限定され居り。余剰金は全て当兵舎で使い捨てる必要あり。男子は酒宴、女子は甘味をと終戦後1年間、高粱1日2食で喰い延して来たのが夢の様なり。

文 もち米、砂糖、塩、味の素、小豆等少量

小生 煙草、日本酒の補充

7月22日 早朝宿舎を発ち、胡蘆島に向う。

胡蘆島にて全員D.D.T.の洗礼を受け、引続き予防注射を受く。然る後、物品検査を受け、引揚船に向うも、途中、中央軍兵士に随時検査を受け、適宜没収さる。

吾れ万年筆を失う。

39班員、T医師（社病院勤労医）附帯医師として一般人より早く乗船。＜T医師＞、炎天下疲労に倒れる者を顧り見ず白服に着替えブリッジより一般人の乗船を見る。本船出航後、病人診察するも、医薬カバンを紛失し居り、皆々の失笑を買う。

引揚船はリバティー V057号なり。吾れ等は第3層のスノコ敷き船艙なり。

乗船中、開拓団よりの引揚者あり。女史全て頭髮丸刈り、ドングロス＜dungrees、麻袋＞に穴を明け、頭、手を通し、衣類とし居れり。痛ましき限りなり。

乗船中の食事又当番による使役にて高粱飯なり。

出港後、帰港先舞鶴と発表さる。

出生地なり。

航行中、病死1名。水葬行わる。哀れなり。

7月26日 舞鶴西港入港。和田沖に假泊。

桡疲の結果、下痢患者あり。上陸禁止さる。

停泊中の乗船、蒸し風呂の観あり。

7月30日 上陸開始。西埠頭に上陸。

上陸倉庫内にて税関検査後、米軍立会の上D.D.T.をかけらる。

昼食としてカンパン1袋、磨き鯉1本を支給さる。

臨港線貨車にて市内上安引揚者収容所（現自動車学校）に入る。

幾月振りかの入港を終え、コレラ、腸チブス等注射8本をうつ。

本夕食

白米御飯 盛り切り

小鯛の煮付

日本酒1合

食後、夫々引揚地の確認及その乗車券。7日分の食料としてカンパンを支給さる。

7月31日 貨車にて西舞鶴駅に向う一行と別れ、榎峠（中学時代の5年間徒歩通学せる途なり）を徒歩にて中舞鶴へ向う。

荷重く、肩痛し。道柴口に至り、文を待たし我のみ次兄野田隆介宅を訪れる。

戦時中、移転し居り。漸く中町4丁目の就職先を訪れる。

甥正巳と自転車にて道柴口に文を迎へる。

終戦后、初めて安眠、然も故国にて。

【註 記】

- (1) 本稿の作成にあたり、吉田廣作氏の妻^{ふみ}文氏、長女^{みよこ}京氏、吉田文氏の弟、風間^{みつる}充氏から貴重な資料を提供していただいた。また、御三方からは文字の解説や記述の背景に関する面談、手紙、電話での取材についてもこころよく御協力をいただいた。記して感謝いたします。
- (2) 鞍山の会は、「満洲国」時代の鞍山に関係する学校や企業の同窓会が、会員の高齢化という事態に直面し、横のつながりを求めて組織した連絡会である。同会は2001（平成13）年からほぼ毎年一度、開催され、鞍山関係者の旧交を温める親睦の場となってきた。しかし、同会もまた世話役の高齢化が進んで継続が困難となり、2010年4月に開催された「最後の鞍山会」を締めくくりに解散した（鞍山中学校同窓会、2010、14～5ページ）。
- (3) 吉田廣作氏は7月22日に胡蘆島で帰還船に乗船する際に国民党軍による物品検査を受け、万年筆を取り上げられた。記録が鉛筆書きになったのはこのためである。ちなみに第3メモには7月23～31日についても記録が記されている。鞍山出発前後から胡蘆島滞在までの時期については記録を書き記す余裕が無く、乗船以後は鉛筆で記録していた吉田氏が、後日、不鮮明になっていた鉛筆書きの記録の一部を復活させたものと思われる。

【参 考 文 献】

- 阿部邦雄（1946）．「引揚日誌」（阿部邦雄『紺の手帳』仙台、わたらい光版社、1983年所収）。
- 鞍山中学同窓会（2010）．『天馬』第27号、2010年6月30日。
- 飯野海運株式会社社史編纂室編纂（1959）．『飯野60年の歩み』東京、飯野海運株式会社、1959年7月。
- 池田拓司編著（2003）．『鞍山・満洲・終戦前後日録 1945.1.1.－1946.12.31.』、2003年5月27日、私家版。
- 松本俊郎（1995）．「瀬尾メモランダムについて」（『岡山大学経済学会雑誌』第27巻第2号、1995年9月）。
- （1996）．「資料紹介：1940年代後半の鞍山日本人社会に関する歴史年表——『鞍山回想録 石川義助先生を憶う』、『鐵都鞍山の回顧』を中心に——」（『岡山大学経済学会雑誌』第28巻第1号、1996年6月）。
- （2000）．『「満洲国」から新中国へ——鞍山鉄鋼業から見た中国東北の再編過程、1940～1954年——』名古屋、名古屋大学出版会。
- 中村巖・沖原光彦・山田敏郎（1946）．『終戦以後の満州事情報告書』1946年2月21日。実際の執筆者は山田敏郎である。
- 吉田文・吉田京（2010）．「吉田廣作 年譜」、2010年7月。吉田文氏、京氏が吉田廣作氏の覚え書きより抜粋して作成。
- Pauley, Edwin W. (1946). *Report on Japanese Assets in Manchuria to the President of the United States*.
- Seo Kiyozo (1946). Chronological Record Presented by Mr.Seo, Formerly a Director of the Manchuria Iron and Steel Company, Anshan, Appendix 2-A-1, in Pauley (1946).

* 科学研究費補助金 基盤研究（C）「中国、日本、米国の政府資料に見る中国東北経済の戦後復興」（課題番号 21530340、平成21～24年度）の成果の一部である。